

長谷川四郎全集 第二卷

長谷川四郎全集第二卷

一九七六年三月五日印刷

一九七六年三月一〇日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

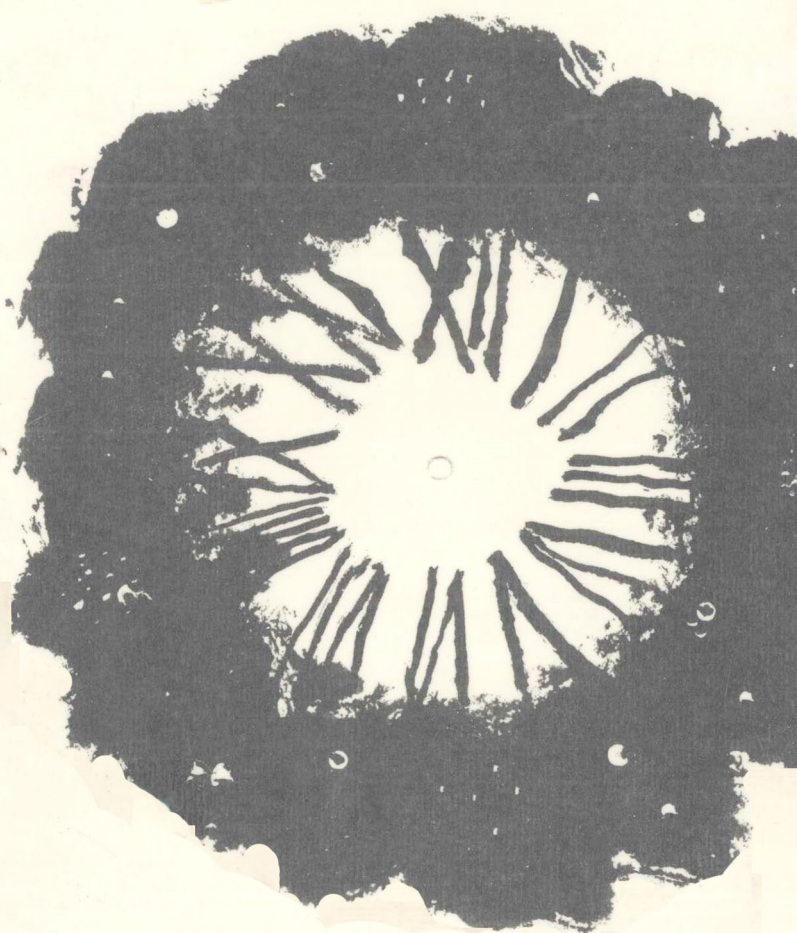
中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七六年(検印廃止)著・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第二卷

文庫



長谷川四郎全集
第二卷
晶文社



1 鶴

張徳義

11

鶴

26

ガラ・ブルセンツォワ

47

脱走兵

69

可小農園主人

99

選択の自由

122

赤い岩

135

2

白鳥湖

145

古い手紙より

151

客

163

大雪

178

二つの姿

181

- 『バスキエ家の記録』訳者のあとがき 199
- ロマン・ロラン『革命によって平和を』 アルベール・カミュ『異邦人』 206
- 『ソヴェト文学入門』はしがき 208
- 『グラン・モーヌ ある青年の愛と冒険』あとがき 209
- 詩集・絵画・その他 213
- アンナ・ゼーガース『死者はいつまでも若い』 216
- 新人発言 218
- フランツ・カフカ『審判・アメリカ』 220
- アンドレ・スチール『最初の衝突』第一部「基地の人々」 223
- 『師に寄せる手紙——彫刻家ロダンへの手紙』序・あとがき 224
- 凶作基地 231
- 『ウスリー紀行』解説 241
- チャールス・モーガン『脱出路』 ヴェルコール『六つの声』 245
- カザケーヴィチ『オーデルの春』 246
- リルケとロシヤ 247
- 『飢餓術師』あとがき 251
- AP・ジローデル 往復書簡『愛と信仰について』 253

Alma Mater 255

北海道旅の思い出 259

私のふるさと・北海道 261

かたぎ 266

二人の西洋人 267

徒歩旅行 269

函館随筆 272

北の家族 276

コリンズとエルベ神父 278

わが故郷函館 280

三尺船頭さんのこと 282

虹 284

随筆丹下左膳 289

『探偵文芸』 292

思い出すまま 293

海太郎兄さん

295

兄の思い出

298

へわが著書を語るへ『鶴』

303

飲酒のいましめ

303

シベリヤから還って

304

わたしのモデルたち

306

シベリヤの思い出

308

鶴

310

『シベリヤ物語』作者のことは

312

へ私の処女作へ『シベリヤ物語』

313

シベリヤの春

314

共に働き共に歌う日を

316

作者のノート・2

319

解題 福島紀幸

330

1

鶴

1

ハイラル河のその地点に橋が一つかかっていた。それは随分貧弱なものであったが、乾草を積んだ馬車くらいだったら、何台通ってもびくともしなかった。ところが、ある年の夏、一群の日本兵が二台のトラックに乗って到着し、付近に野営して、その橋をすっかり壊してしまった。人口まばらで、広々と平らなこの地方では、この噂は馬上の人によって伝えられた。そして、その橋へ近づきつつあった人々は、いま来た路を引き返したのである。するとまた新しい噂が追いかけて来た、——日本兵は前よりも立派な橋を作って、何処かへ立ち去って行ったというのだ。そこで人はふたたび橋へ近づいて行った。なるほど、すでに遠方から晩夏の太陽に輝いて、白い真新しい太い材木で出来た橋が見えてい

た。人々は足をはやめた。

しかし近づくにつれて橋の傍にそびえている岩の上に、一人の人間が立っているのが見えて来た。さらに近づく、その人間が銃剣を持っているのが見えた。そして更に近づく、その人間が銃口をこちらへ向けるのが見えてきた。恐れをなして引き返そうとすると、岩の下に作られた小屋の中から、もう一人の人間が、これまた銃剣をかまえて出現し、無気味に早い歩き方で真直ぐこちらへ近づいて来た。そして聞いたことのない声が、聞いたことのない言葉を言うのが聞えた。

——通行証を見せろ。

誰一人として通行証を持っているものはいなかった。それのみか、通行証とは何かも理解しかねた。一体、何処で、何者が、いかにして、いかなる權威で、その通行証なるものを与えるのか、さっぱり判らなかつた。ただ一つ判ったこと——それはこの橋を渡れることはどうやら死を意味するらしいということであった。そして、それで十分だった。何故というに、それは決して人を通さ

ないために架けられた橋だったからである。

そこで、この橋をめぐり、広い地域にわたって、交通は途絶えた。その付近には人の話声も馬の足音も聞かれなくなった。河は音もなく橋の下を流れ、冬になると完全に凍りついて、更に音もなく静かになった。ただ岩の上をのぼったり、おりたりするマリオネットのような兵隊の姿が小さく見られた。彼らは交代で一人一人岩の上に立ち、周囲の野原をへいげいしていたが、そこには人影一つ現われなかった。土地の人々はもう決してこの橋に近づかなかったからである。ただ月に一度、二里ばかり離れた部落に駐屯している中隊から糧秣を積んだ馬車が到着した。その時、岩上の兵隊はすでに遠くから早くもその姿をみとめ、いそいで警報用の針金を引っ張った。すると岩下の小屋の中にぶら下っている空罐ががらりと鳴って、糧秣の接近を伝えたのである。これ以外に、この警報の発せられることは絶えて無かった。それは恰も自分の食料の到着を見守るために作られた監視哨のように思われた。

けれども、本部の将校たちがひそひそと話したところによると、この橋は戦路上非常に重要な地点を占めており、そこを通過して、戦車の大部隊が敵の方へ向って突進することになっていたのである。それはただそのために架けられた橋だった。

五月のある日だった。草はまだ枯れていて、吹く風は冷たかったが、日中の太陽はもうすっかり暖かだった。低い柳の木立が方方に群をなして生えていて、ゆるやかに起伏し、ところどころあ

らわれた砂地の上には夜の狼の足跡がかすかに残っているだけで、人気がなく荒涼とした、河沿いの野原を通過して、一人の男がその橋の方に向って歩いていった。その男はぼろぼろの綿入れの短い青い中国服を着て、同じくぼろの青い綿入れズボンをつけ、日本式の黒い地下足袋をはき、灰色の風呂敷包みを帯のように腰にまきつけて、頭には厚いフェルトの焦茶色の縁無帽をかぶっていた。彼は下の方を向いてすたすたと歩いていったが、ときおり立ち止まっては、うしろを振り返ってみた。その様子はあたかもこの単調な風景の中をどれくらい進んで来たか、目測しているように見えた。それから彼は河の面を見たが、それは彼の進む方向とは反対の方へ、静かにところどころ渦巻いて深々と流れていた。しかし、広大な空間はさらにもっと深々と静かだったので、流水が岸辺の砂地を少しづつけずるようにこすってゆく微かな音と、たまたま水中に落下する小石の音が一つ聞えただけだった。男はまた歩き出したが、その足は必ず草の上を踏んで行つた。彼は砂地の前に来ると、まるで自分の足跡をのこすのを恐れるかのように、それを迂廻して行つた。彼はすでに遠くの方から白い橋の存在に気づいていたが、それ以来ほとんどただ足もとを見ながら進んで行つた。何故なら河に沿って進むかぎり、必ずやその橋に到着することは確実だったからである。それで橋が非常に近づいた時も、彼はそのそばの岩の上に立っている兵隊の姿に気づかなかった。さらに、その兵隊が銃をかまえたことにも気づかなかった。彼はただ銃声を耳にして、初めて停止したのだった。兵隊は本来ならば、ただ

下の小屋に警報を伝えるべきで、発射すべきではなかったのだが、突然、あまりにも橋に接近している見知らぬ男の姿に気づき、おどろいて非常の手段を取ったのだった。兵隊はその男に狙いを定めなかったのか、それとも、狙ったけれども的^めはずれたのか、ともかく、弾丸は彼に当らなかつた。彼はただ頭上の空気をかすめて過ぎた鋭い音を聞いた。兵隊の方では、これによって、その男が身をひるがえし、一目散に逃げ帰るであらうと期待した。ところが、一瞬停止したその男はたちまち突進を開始し、死物狂いの勢いで一気に橋を渡って行った。同時に、今の銃声を聞いて、小屋の中から数名の男がとび出して来た。その中の隊長とおぼしき一人が銃をかまえて狙いを定めた。彼は狐射ちの名手だった。しかし逃げる人影はすでに小さく、この距離で、素早く動く物体を射止めることは難しかった。それでも彼は引金を引いたが、はたして当らなかつた。一瞬、男は無事に逃げのびるかと思われた。その時、一人の兵隊が元気のいい白い小さな蒙古馬に乗って、ギャロップで彼を追いかけた。男はもう橋を渡り、柳の木立の間を走っていたが、息が切れて立ち止まり、背後から橋板をひびかせてかけて来る蹄の音を聞いた。彼は観念したように振り向いて、その場に膝をついた。こうして捕まった彼——張德義は岩の下にある半地下室の小屋につれて来られた。

2

北京の町に初めて電車が通った時、張德義はまだ少年だったが、車夫たちの示威運動に参加して、レールの上に寝たのだった。彼はもともと百姓だったが、土地も農具も持たない彼は村では食えず、北京に出て車引きになつていたのである。彼は人を乗せたり、或いは空車を引つ張ったりして、北京のあらゆる街や路地を何年も歩きまわった。それは彼には果しもなく長い一筋の足跡路のようになつた。それから父親が死んだので、また村に帰った彼は、同じく張という姓の大きな農家の雑役夫として働き、父親のあとをついで、母親を養っていた。人々は、真夏の炎天下で、彼が一日中、張家の井戸水を汲みあげて、それを張家の畑にそいでいるのを見た。また秋には張家の穀物を張家の麻袋に入れ、それを張家の馬車に積んで、町へ運んでゆく彼の姿が見られた。こうして年々は過ぎ、彼は既に結婚して、息子が一人生れていた。そして、ある年の冬、彼は粗末な板で棺を作り、中に母親を入れて、張家の馬車を借り、泣きながら村はずれの墓地へ埋めに行った。それから彼は妻と息子を村にのこして、また北京に出て来たのだった。それというのも、その頃、北京の町にはたくさん日本人が入りこんで、さかんに車を乗り廻していたからである。彼は彼

自身の父親のように、自分の息子を北京に出そうとしたのだが、この息子はどうしても母親の傍から離れたがらなかった。で、自ら北京に出てふたたび車引きになった彼は、瀛環飯店（インカン）といういかめしい名前の、ろくでもないホテルの前にたむろして、そのホテルに泊っている日本人が門から出て来るたびに、沢山の競争相手と一しよにわれさきにとかけ寄って、車をその人の足もとにすえて、「車でいこう！」と叫んだものだったが、これが彼のおぼえこんだ唯一の日本語だった。日本人はたいいてい、彼を無視して、見向きもせずに通り返したが、何回かに一度は彼も成功して日本人を車に乗せ、日本人のカフェーに引つ張って行った。こうして彼の隠しポケットには少しずつ金がたまっていた。ある時、空車を引きずって夜の裏町を瀛環飯店の方へ帰って来る途中、突如、闇の中から彼は呼び止められた。彼が立ち止まると、もうその人物は車に乗っていた。それは日本刀やらピストルやら図ノウやら双眼鏡やらいろんな物を到るところにぶら下げてやたらと重たい人物だった。彼はこの怪物を背後に引きずって、暗い路地をいくつも通りぬけ、やつのことで一軒の家の前に辿りついた。その家は電燈でまばゆいばかり輝いており、彼はそれを遊廊だと思っただが、じつはそれは軍人会館というものだった。ところで目的地に到着すると、その重たい人物はいきなり抜刀して彼を追い払い、一銭も金を支払わなかった。それどころか、彼の車はうしろから日本刀でばさりと切りつけられ、幌が骨もろとも大きく裂けてしまった。そのため彼は車屋の親分から賠償金として、貯めた金を

そっくり捲きあげられた。

その頃、北京の町の壁々には労働者募集の大きなビラが方々に貼り出されていて、それには満州労働会という署名がしてあった。張徳義は字が読めなかったが、通りすがりの親切な人がその説明をして、いろいろと彼によいことを囁ささやいてくれた。それからやがて張徳義の姿は瀛環飯店の前から消えてしまった。彼は汽車に乗って、故郷の方へではなく、北の方へ、沢山の見知らぬ仲間たちといっしょに長城外へ、関外へ、満州へ運ばれていった。

張徳義は手紙を書かなかったが、村に残して来た妻と息子のことについて考えていた。彼らはこれまた張家のものである納屋のような一室に住んでいて、息子は彼と同じように、また彼の父親と同じように、春には張家の畑を起こし、夏には張家の井戸水を汲み、秋には張家の麦を刈り入れて、冬には張家の馬車をひき、こうして母親を養っていたが、この女は病身で蒼い顔をしており、ふらふらして、張家の広い院子（にわ）を掃除するのが精一杯だった。ほんとういうと、彼女の病名は慢性の栄養失調だったのだ。

張徳義はこの二人の肉親のためそこばくの金銭を持って、新年までには村に帰り、豚肉の入った正月の団子を二人に食べさせようという、ささやかな希望を抱いて北京に出て、更に満州まで出稼ぎに来たのだった。彼は三昼夜も汽車で運ばれ、ジャラントンという町で下ろされた。そこには沢山の苦力たちがボロをまとい、シラミだらけになって、有金をバクチにうちこんでいた。なぜというに、この町から更に奥地へ入ってゆくには、特別の許可証が

必要であり、それを持たない不運な労働者たちはみんなここで下ろされたからである。だが張德義は滿州勞務會發行の、その許可証なるものを持っていたので、そこからほとんど自働的にプハトの町へ送られ、興安嶺の伐採苦力となつて、さらに貨車で山中の小さな部落へ運ばれて行つたのである。長い汽車旅の後、彼がぼんやりと見たものは、夕空の中にくろくろと大きく積み上げられた丸太であり、その上にそびえている回教徒寺院の黒い三日月だった。翌朝、彼は馬車で伐採の現場へ向つて出発したが、部落を出はざれる時、彼は一頭の黒い馬が死んでいるのを見た。そして髯だらけの異様な人物がその馬の皮を剥ぎ、耳を切り取っているのを見た。

馬車は折れ曲つた谷間を長いこと進んでゆき、終に山の澄んだ空氣の中に微かに糞便の匂いがただよつて来て、山陰から一軒のバラックが現われた。それが伐採苦力の小屋だった。張德義はその小屋の中央に大きなカマドがあり、そこでコーリヤンの飯がたかれていますのを見て、何となく安心したのだった。彼はその飯を食ひ、そして前からいる連中と尻をならべて戸外に排泄しつゝ、早くもこの新しい生活の中に入つていった。こうして彼は大きな樹木を何本も切り倒したが、一向に金はたまらなかつた。なぜなら彼の夢みた賃銀が彼の手に入るまでに、彼は前もつてそれを食べてしまうように仕組まれていたからだ。腹の減つた彼ががつがつと食つてまだ足りないそのコーリヤンメンが、彼の賃銀をほとんど食つてしまつたのだ。おまけに旅費だとか被服費だとか、そ

のほか何だか彼にはわけのわからぬものが差引かれて、彼の手に入る時は、それは煙草錢くらいのものでつた。彼は一番安い葉煙草を少ししかのまなかつた。

一季節働いてプハトの町に下りて来た時、彼はそれでも少しばかりの金を握つていた。プハトの町は中央に一筋の小川が流れており、片側は小高い岡になつて、そこには坂道がついていて、片側は平地で、そこについている道路を歩いてゆくと、直ぐ野原に突きぬけて、野原のむこうには山がすぐ迫つて見えた。苦力たちが山から下りて来るのを見計つて、そういう道路のまん中に芝居やら手品の興行がかかつていて、それにはまたしても滿州勞務會主催という看板が出ており、その前にはいろんな飲食物の屋台店が立ちならんでいた。そこで張德義は一杯の酒を飲みながら金を勘定してみた。そしてそれがどうやら北京まで帰ればかつたつであることを知つたのである。彼はその時、手品小屋の幕があげられて、中で一人の男が口をあぐりあけて、腹の中から無限に長いはらわたのようなリボンを次から次へと取り出すのを、ちらりと見た。彼は長いこと考えこんで、それから立ち上つた時、決心していた、——「たんジャラントンへ引返し、そこから改めて興安嶺を越えて、ジャライノールの炭坑へ入ろうと決心したのである。

張德義は四十歳を越え、瘦せて骨ばつてはいたが、頑丈な体格で、全身にわたつて針金のように丈夫な筋が張りめぐらされていた。彼はいかなる労働にもたえることができ、労働以外に彼の生